

『くちびるに蝶の骨～バタフライ・ルージュ～』

著：崎谷はるひ

ill：冬乃郁也

ぜひゅう、と喉から音がした。

身体の奥が爛れたように熱い。もうどれだけの間いたぶられているのか、わからなくなるほどに性感は高まっている。

背中から抱きしめられた状態で、延々と続く愛撫はもはや拷問に近かった。せめてもの満足を得ようとするのか、指を埋めこまれた身体の奥の粘膜は、ひっきりなしに蠢いてはいいところを指先にこすりつけようとする。

「や……あっ、あっ」

立ったまま、大きなデスクに手をつかさされ、性器を、尻を音を立てていじられる。そんなシチュエーションであるのに、勃起もするしあえぎもする。そんなだらしない身体を背後にいる男は揶揄した。

「こんなスケベな身体で、なにが『いや』なんだよ」

あまい低い声。冷たいようでいて穏やかなそれが、千晶の脳をかき乱す。

こちらは全裸に引き剥かれ、汗を、体液を垂らして乱れきっているというのに、笑んだ男の表情は、いっそ涼しげなまでに余裕だ。

「おっぱいいじっただけで、びんびんだったくせに。ここにきたのも、しばらく抱いてやってなかったからだろう？」

低くどろりとした響きのささやきは、どこまでもいやらしい。そして、肌に触れる上質なシャツの感触が、一方的に淫らさを暴かれる屈辱をさらにひどくする。

「ちが……違うっ。俺は、話があっ……ああ、あ」

「違わねえよ。コレが好きだろう、千晶」

「ほんとに違うっ」

振り返ったところで、表情をたしかめることはできない。逃げようと抗った際、視界をふさぐように目隠しをされてしまったからだ。

最初は手も縛られたけれど、おとなしくするなら目隠しとどちらかだけは取ってやると言われ、そちらだけはほどいてもらった。明日は出勤日で、スーツの袖から見える緊縛の痕など残しておくわけにはいかなかった。

だがその代わりに、膨れあがった性器が細いヒモのようななにかで縛られた。そのまま長いこと、なぶられ続けている。

「ど……して、こん、なっ、あ、ひ、ひどい」

「別れるとか、ばかな話するからだ」

あえぐように問えば、くだらない話をしたお仕置きだと、彼はにべもない。

人払いしたオーナールーム、終わりにしたいと告げる唇はキスでふさがれ、話を聞けと振りあげた手はあっさり封じられた。逃げられないようにと、手近にあった布で目隠しをされ、身体をいじられれば、長年かけて仕込まれた身体はどこまでも快樂に弱かった。

もう何度目かわからない別れ話を切り出そうとして、「話があるなら店にこい」と告げられた。相手のテリトリーでそんな話をするのがどれだけ危険なことか、わかっていて出向いた千晶がばかなのだらう。

（そうだな。俺は、ばかだ）

心はともかく、身体は彼に従順だ。彼の言ったとおりに、終わりを告げにきたはずなのに、どうしてこんなことになっているのか。そんなことすら、快樂の狭間に薄れてわからなくなる。

もうろうとしながら、手慣れた愛撫にあえぐ千晶の聴覚は、自分の鼓動と淫らな声になかばふさがれていた。けれど――過敏になった神経は、誰かの気配を感じた。

（え……？）

続いてそれを証明するかのよう、がたん、と大きな物音がした。びくりと震え、濁っていた意識が突然クリアになる。

「な、なに？ なんか、音、した？」

「ああ、悪い。俺が椅子蹴っただけだ。心配するな、千晶」

わざとらしいほどやさしく言って、彼はわざわざ千晶の身体をひっくり返す。怪訝に思う間もなくデスクに腰かけ、膝のうえに千晶を抱えあげ、誰かに見せつけるように脚を開かせた。その姿は、幼児が親に用足しをさせられるのとまるでそっくりだ。

「な……つなに？」

「なんでもねえよ、体位変えただけだ」

目隠しのせいで、前後の感覚も、部屋のどの位置にいるのかも、正確には判断がついていない。けれど

直感で、いまの自分が部屋のドアに――外に向かって大股を開かされ、秘密の場所もなにもかも暴かれていることだけはわかった。

そうでなければわざわざ、こんな体位を取る必要はない。

「いやだ……いやだよ、誰かいたら……」

ほとんど確信的に、見られていることを知りながら、弱い声音でそう告げるのが精一杯だった。湿った股間がひんやりとする。羞恥に全身を赤く染めた千晶は怯えた声しか出なくなり、身がすくんで抵抗もできなくなった。

「いねえよ、ほら。好きだろうが、こうしていじられんの」

「あっ、いやっ」

声があまさを増したことで、誰もいないというのが嘘だと、千晶に確証づけた。

(やっぱり、誰かいる?)

彼は、誰かにこの痴態を見せつけようとしている。千晶が気づいていることも理解している。それをあえてやらせることで、心を折ろうとしている。

誰なのかはわからない。店の若い子をからかっているのかもしれない。

彼に近づくしつこいオンナー――性別ではなく、王将にとって自分以外の人間はオスとオンナしかいない――に、この場面を見せてあきらめさせようとしているのかもしれない。あるいは、こうして情事を見せつけることで、そのオンナとの刺激的なセックスを愉しむのだろうか。

予測は千晶の妄想ではなく、どれもこれも、過去にじっさいにあったことだ。

ぞっとした。異常な状況にではなく、そんなときにも感じてよがる自分自身に、だ。

「いや、いやああ、もう、もう……っ」

暴れて抵抗すると、彼は、指で千晶の奥をかきまわし、耳を噛んでは乳首をひねりあげる。縛められた性器が膨れ上がり、ひどい痛みと苦しさにのたうちまわるしかない。

「イイ子だな千晶。おねだりしたら許してやるから」

目隠しの裏側で涙を流して哀願すると、くっくつと笑った彼は早く言えよと告げ、いい子だ、言え、とあまい声でささやいた。

「言わなきゃずっと、このままだ。痛えだろ？ これじゃあ」

ぴんと指先で性器を弾いて告げられた言葉のとおり、根元を縛った紐のおかげで、すでに千晶は限界を越えていた。荒れ狂う快楽は行き場を失い、千晶から理性も思考回路も奪いとっていく。

みじめであさましいことはしたくない。けれどそれ以上に、終わりが欲しい。

「……射精したいだろ？」

気持ちよく出しながら、奥までしっからはめられたいだろう。キスしたまま乳首をいじられて、うしろをえぐられて犯されたいだろう？

「ぜんぶ、してやるぜ？ 千晶。いれて、って言ったらな」

「あっ……あっ……」

耳をそっと噛むようにして、肌を撫でる男は、こんなときだけやさしげな、なだめるような声を出す。思わせぶりに過敏な粘膜の際を指で撫で、縁を揉んで軽くつねる。足りないものを知っていると教えられ、不随意筋がびくびくと、男の爪のさきを舐めるように痙攣した。

だめだ、いけない。ふざけるな、殺してやる。千晶の心は負の感情で満たされ切っているのに、身体はもう限界で――壊れきった千晶は、あまいだけの言葉にすぎた。

「……て、ああ、いれ、て」

「もっとはつきり言え」

耳を嚙られ、疼痛は股間と爪先と心臓にまっすぐ突き刺さった。

「ああ、ああ、いれてえ、いれて、王将の……入れて！」

叫ぶと、さらに脚を開かされ、ぐずぐずになった身体の奥にそれを押し当てられた。歓喜と期待に頭皮まで鳥肌が立ったけれど、なぜだか背後の彼が、にやりと笑ったのがわかった。

「俺の、なんだ？ ほら、スケベなケツ振って、ちゃんと言え」

誰かの視線が、千晶の淫らな場所に突き刺さっていた。これはかわいいだろうと、自慢するような気配が背後から感じられる。

(ひどい)

じわり、と目隠しの布がまた湿りを帯びた。けれどもう、身体も心も限界だった。

見られている。誰かに見られている。それがどれほどの苦痛かわかっていながら、彼は千晶の心を叩き潰すために、さらに辱めるのだ。

「なあ、千晶？ 言わないのか？」

どうする、と問うように、張りつめた性器の先端が粘膜を軽くかすめてなぶっている。くぶくぶと音を立てて、挿入の真似事をされるのがたまらずに、ごくん、と渴いた喉を嚥下した。

だめだ。欲しい。どんな辱めでもいい、いまこの瞬間、男が欲しい。乾ききった身体になにかもらえるものはひとつ、快樂しかないならそれだけでいい。

「おっ、王将の、すごいのを、俺の、スケベな穴に、はめて、くだ.....っあああ！」  
卑猥にすぎる声で哀願したとたん、すさまじい質量のものが濡れた虚を埋めつくした。頭がじいんと痺れ、きつくつぶった目の奥でちかちかと星が飛ぶ。  
縛られたままの性器が、唐突に萎えた。けれど体内を走る強烈なパルスは弱まることはなく、びくりびくりと細い身体が痙攣する。

千晶の身体は慣れた女の膣のように、挿入されて絶頂を味わう。それがたまらなく惨めなのに、衝撃だけで達したことが不満に思えるくらい、あとを引く快樂だった。

「.....っはめたぜ、それで？」

複雑に淀んだ心を見透かすように、軽く息を混ぜた声で男が嗤い、そそのかす。あくまで言わなければならぬと告げる声に、千晶はすべてをあきらめて、叫んだ。

「あ、あ、ずぶずぶ、して.....っ」

ねだる言葉に喉奥で笑った彼は腰を複雑に動かした。先端だけを含ませたまま前後したかと思うと、深く突き刺し、小刻みに振動させて千晶に悲鳴をあげさせる。

張り出した先端で、指ではもう何度も絶頂へと追いかまれたスポットをえぐり、かと思えば右へ左へとまわして粘膜をぐるぐるかき混ぜる。

どこか意識の遠いところで、ぱたん、という音が聞こえた気がした。けれどもう、千晶にはどうでもいいことだった。

「もう、くだらねえこと言うなよ。次にだだ捏ねたら、こんなもんじゃねえぞ」

ドアの閉まる音と同じく、将嗣の脅すような声もろくに聞こえてはいない。耳を噛むあまい痛みだけが、疼痛となって神経を騒がせるだけだ。

（いい、いい、ああ、いい.....）

射精すら許されないのに、このセックスは、たまらなくいい。心はずたずたになっても、星がまたたくような絶頂感が繰り返し襲ってくる間には、哀しさもむなしさも忘れられる。

不安定な体勢は、両脚を抱えこんだ彼の腕にのみ支えられている。

身体を開き、ひらひら、ゆらゆらと揺れる千晶の姿は、ピンで刺された蝶のように頼りなく、脆かった。

\*\*\*

A4サイズのプリント用紙にそっけなく記された『辞令』の文字を、柳島千晶はまじまじと見つめた。各種の連絡事項についてはメールかメッセージで通達されることが常なのに、この手のものだけは文書化するのがやはり通例であるらしい。

「形式的なモノでしかないけど。一応、移転に伴って部署編成も変更になるから、理解してもらえるかな」

千晶は、気の弱そうな課長の声に「わかってます」とうなずいた。すでに決まりきった異動の話わざわざ伝えるための紙と、形式的な申し送りの時間。いずれも無駄だと思いつつ、書類の下部にある文字列を目で追った。

（本社屋移転先.....山梨県か）

たったいま、それを手渡したばかりの課長は、顔に浮かんだ冷や汗なのかなんなのかわからないものを、手にしたタオル生地の手拭いでひたすら拭いている。

さほど広くもないが狭くもないオフィスのなか、各人のデスクの上にはノートマシンが設置されている。だが、デスクの周囲には段ボール類が置かれ、それぞれの私物や書類、配線器具などがめいめい詰まっていた。

「ぎりぎりまで引っ越し作業が終わらないかもしれないなあ。柳島くんは、片づけは？」

「ぼちぼちやってます」

千晶の勤める『株式会社オフィリア』は、総合通信販売の会社だ。さほど大手ではないながら、かつてはカタログ通販、近年はネット通販を業務のメインとしている。通販好きな女性なら、一度は耳にしたことがあるかもしれない。

千晶はその会社のシステム担当で、いわば専任のシステムエンジニアだ。しかしながら実体は、パソコンならびにインターネット関係についての雑用係のようなのだと自覚している。

十年前の入社時、インターネットの普及でIT産業は真っ盛りだった。この会社もWEB通販にいち早く手をつけたおかげで、平成不況をよそに業績は好調だった。

だが、一億総ブロードバンドと呼ばれる時代となり、状況は一変した。

かつては委託が多かった通販もいまでは各小売りや個人が、それぞれWEBサイトを開き、直販するのがあたりまえの状態へと変化した。競合他社には海外の大手がどんどん飛びこんできて、市場は激戦。

あげく近年訪れた百年に一度と言われる不況のあおりをまんまとくらい、規模縮小と経費削減を余儀なくされ、倉庫代やオフィスの家賃が安い地方へと引っ越し羽目になっていた。

「この会社もほんとに引っ越し多くて、まいるね。不況でね、このビルの家賃も厳しくなったみたいでね」

ばやくような課長の言葉のとおり、現在のオフィスは埼玉県の蕨市にあるが、数年前、東京の北区から移転した。さらに遡り、設立当時は三田に会社があったらしいけれど、その時期のことを千晶は知らない。わかっているのは、会社の業績が悪くなるたび、オフィスがじわじわと田舎へ引っこんでいくということだけだ。

気の弱い上司は、ちらちらと無言の部下の顔色をうかがいながら問いかけてくる。

「移転したら、それに伴う人事異動できみが係長になるし、悪い条件じゃないと思うんだけど」

おずおずと彼がつけくわえるのは、管理職につけば微々たる手当の代わりに残業代は出なくなり、結果として手取りの給料が下がることがわかっていたからだ。

「う、請けてくれるよね……？」

今回の移転に伴い、かなりの人数の社員が辞職や転職を願い出た。一応、引っ越したさきには社員寮などもあるし、どうしてもいまの住居から通いたいものには、特例で定期代も出る。しかし、山梨県でも東京とは反対側の県境、長野に近い場所とあっては、東京暮らしからどんどん離れていくのに耐えられない、という人間もやはりいたからだ。

でも、いまの俺には好都合だ。千晶は、片頬でそっと笑った。

「まえにもお話しましたが、断るつもりはないですよ」

「そ、そうか。まあ、幸いほら、柳島くん独身だし。とくにしがらみもないよね」

念を押す上司にうなずいてみせると、肥満ぎみの顔に安堵の笑みが浮かぶ。典型的な中間管理職である彼は、今回の移転でかなりの人間に突きあげをくらい、早く結論を出せという上層部との板挟みに、胃を痛めているという話を耳にした。

「大丈夫です。問題はありません。ただ、寮に入る際の引っ越し代とかはどうなります？」

「一応は補助金が出るから。心配しないで。あ、でも、いま住んでるところに較べると、かなり不便になってしまうけど……学生時代のお友達のマンション、シェアしてるんだっただね？」

千晶が新宿の一等地に住んでいることは、当然上司も知っている。現在の会社の給料ではとうてい払えるはずのない家賃については、彼が口にしたとおりの言い訳を通していた。

じっさいには、もっと複雑で歪んだものが潜んでいる私生活のことなど、誰も知らなくていい話だ。千晶はきっぱりと言ってのけた。

「私はほとんど寝に帰ってるだけですから、ふつうの生活環境があればかまいません」

「う、うん。寮の近辺には商店街もあるし、そこまでド田舎ってわけじゃないしね」

その返事にほっとした上司がまた汗を拭き、千晶はうなずいてみせる。

もういよいよ、潮時だ——そんな言葉が頭をよぎった。同時に、華やかで苛烈な新宿の街に根を下ろした男のことを考えた。

千晶の十二年を縛り続けてきた彼は、この辞令のことなど露ほども知らない。

「ご心配なく。問題はなにも、ありませんから。会社にはご迷惑をおかけしません」

細面で色白の顔に暗い影がさす。けれど、目のまえの上司はそれに気づいた様子はなく、ほっとしたように口早に言った。

「ありがとう、柳島くん。頼りにしてるよ。なに、きっと、山梨も悪いところじゃないよ」

やっと気弱な笑みを見せた上司に、千晶は無言でまたうなずいてみせた。

（どこだって、きっとかまわない）

いまの生活から逃げられるならそれでいい。どろどろした感情をもう、長いこと千晶は腹に抱えていて、そんな自分に疲れきっている。

「そうですね、新しい生活にも、希望はあります」

穏やかに答えながらきつく握った拳の力は、爪が食いこむほど強かった。

\*\*\*

蕨駅から新宿駅までは、電車で約四十分。通勤快速にうまく乗れば二十五分だ。

東京に暮らす人間の通勤時間としては、かなりマシなものだろう。行きは下り、帰りは上りの路線となるため、混雑具合も比較的楽だ。とはいえ千晶の仕事柄、帰宅時間は早朝だったり昼間だったり、ラッシュにあまり関係はない。

ただ、精神的な疲労は計り知れないものがある。

「疲れた」

この日も朝から帰宅する羽目になった千晶は、うつろな目で朝日を浴びる新宿歌舞伎町を眺めた。生ゴミをあさるカラスに顔をしかめながら、およそ人間が住むには適していると思えない、都会の道を歩く。

午前中の歌舞伎町は、まるで死んだような街だ。夜のネオンのなかではあれほど華やいでいる店の並びも、しらけた朝日を浴びると、薄汚れた面ばかりが目につく。

夏が終わったおかげで、午前中のこの時間はさほど気温も高くない。腐臭や刺激臭に鼻を直撃されなくなっただけマシだが、ぼんやりと歩き続けるうちに、陽射しを浴びた背中と腋下がじわりと汗ばんだ。暑いという感覚はないのだが、通勤電車のなかには、まだ残暑対策の冷房が過剰に効いていたから、そのせいもあるのだろう。

都会にいと季節感もなにもかもさっぱりわけがわからなくなる。千晶が季節を感じるのには、デパートやショップのディスプレイが変わったときくらいだ。亜熱帯に近づく日本の四季は壊れはじめている。そして千晶の体感するすべては、もうどうに壊れて久しい。

靴底に感じるのは、汚れたアスファルトやコンクリートの感触。大学進学を機に中部地方から上京した千晶は、はじめのころ、このこつこつという感覚が不思議だった。

むろん、地元でも道路は舗装されていたけれど、市街地からほんの十分車を走らせるだけですぐ郡部に入るような地方都市だ。通った高校は僻地に存在したため、通学路に土と草の生えた場所はいくらでもあったし、緑も多く、雨の日には泥はねが悩みの種だった。

十八で上京した千晶も、三十二になった。ゴム裏のついたスニーカーで泥道を歩いてから、もう十四年が経つ。

地元にも同じ年数戻っていない。いまでは土を踏む感触など忘れかけている。

(ほかに、俺は、なにを忘れたかな)

虫の声や木々のざわめきの代わりに、ネオンに囲まれてアスファルトを歩く。都会の街では道を歩いていても電子機器の音から逃れられない。

実家には、もうずっと帰っていない。というよりおそらく、今後も帰ることはできないだろう。男と暮らす自分を知られるのが怖くて避け続けた結果、完全に機会を逸してしまった。とくに仲良し家族というわけでもなかったが、家族にしる友人にしる、縁の薄い自分というものを、ときどき強く意識する。そんなことを考えること自体、疲れている証拠だと思う。

重い脚を引きずって歩くうち、見えてきたのは三十階建てのタワーマンション。エントランスにコンシェルジュこそいないものの、ホテルのロビーかと思まがうような豪華な内装に、千晶はさらなる疲労を覚えた。

正確な家賃など訊いたことはないけれど、似たようなマンションの相場を調べた際、千晶の月収よりもはるかに高かった。おまけにそれが分譲ではなく賃貸だと知ってさらにぞっとした。

(買ったほうが安いだろ、このレベルになると。だいたい、マンションのくせに風呂場とトイレふたつあるって、どんだけだよ)

男ふたりで暮らすのに、なぜメゾネットタイプである必要があったのか。年収五百万を切るような中小企業の会社員には、あまりに不相応な住まいだと、ため息が出る。

十二年も住まわされながら、ごく一般的な中流家庭で生活してきた千晶はいまだにこの部屋になじめない。ロケーションに対する自分に違和感がありすぎたのだ。

あるいは、いつか出ていく日がくると思い続け、身構えたままの時間が長すぎて、なじみきれなかったのかもしれないが。

(けっきょくは、俺が貧乏性なんだ)

山梨県のなかでもすこし奥まった田舎にあるという察に、心惹かれている。正直なところ、山梨での社員寮となる1Kのアパートのほうが、いまの環境よりよほど落ちつくのはわかっていた。近くに小さな商店街のある、住宅街のアパート。さわやかな土と緑のにおいがする場所とまではいかずとも、不夜城新宿よりは確実に千晶に向いているはずだ。

(静かな街だろうな。そして、.....あいつはいない)

その想像は千晶の胸を奇妙にくすぐり、同時に落ちこませた。

不相応でなじめない環境から逃げることができる安堵と、それほど違和感を覚えながらも、長く居続けた場所への愛着と寂しさ。

どちらも取ることはできない。どちらかを選ぶしかなかった。そして千晶は今度こそ選んだ、それだけのはずだ。

それだけだ。強く自分に言い聞かせながら、専用エレベーターで住居スペースまでのぼると、フロアには絨毯のような防音効果の高いマットが敷かれている。足音ひとつ立てずに部屋のまえまでたどり着き、カードキーでロックを解除する。これらのシステムもまた、千晶がこのマンションを住処と思いつらい理由のひとつだ。

「ただいま」

「——おかえり」

ただの習慣で、ほとんどひとりごとでしかない帰宅の挨拶に返事があったことにはっと息を呑む。

「帰ってたのか」

驚く千晶のまえに現れたのは、この部屋の借り主本人だった。

「俺が俺の家に帰ってちゃ、なにかまずいのか？」

強ばった千晶の表情に、彼は長い睫毛をそよがせ、すうっと目を細めた。あまり機嫌のいい反応ではな

い。千晶は反射的に怯えながら、愛想笑いを浮かべた。

「そんなこと誰も言ってないだろ」

「じゃ、なんなんだよ、その顔は」

シャワーでも浴びたのか、彼のくせの強い髪は湿り、無造作に乱れていた。ふだんはうしろへ撫でつけている前髪をかきあげる長い指。

所作は気だるげで、いっそ優雅にもうつるけれど、長身の男がかもしだす独特の威圧感と淫靡な気配は、十数年のつきあいがある千晶ですらいまだに慣れることがない。

目のまえの男が、ただそこに立っているだけで醸しだす、ぐらりとするほど強烈な色香から目を逸らし、千晶は口早に言った。

「めずらしいと思っただけだ。ほとんど帰ってこないし」

言いながら靴を脱いだ千晶は、玄関からもっとも近い位置にある自分の部屋に逃げこもうと、足早に歩いた。だが自室のドアを開くより早く、壁につかれた長い腕が行く手を遮る。

「なんだよ、王将」

「なんだよって、なにがだ」

困ったように笑ってみせながら、千晶は彼の源氏名を呼んだ。いまではすっかり、こちらの名前の方が彼になじんでしまっていて、本名を口にするとう違和感があるくらいだ。

ホストクラブ『バタフライ・キス』のオーナー、柴主将嗣。彼はかつて『王将』という源氏名でホストをしていた。ひと晩に一千万稼いだという伝説すらある、新宿の顔とも言える男だ。

長身に逞しい体つき。目鼻のくっきりした、派手な造り。南米やイタリア系の外国の血が混じっているのではないかと噂されるラテン系ハンサムだ。じつのところは純日本人で、出身は北国のほうだというのはあまり知られていない。

彼について語られるのは、オーナーとしての経営手段の辣腕ぶり、圧倒的なカリスマと強烈な存在感——そして滴るような色香で手に入れた、財と地位。

常に余裕の笑みをたたえ、その源氏名のとおり誰かのうえに君臨するのが似合う、不敵な男。

そしてただひとりの、千晶の男。

「おまえ、なに焦ってるんだ？ なんで逃げようとする」

色気のある厚い唇を笑いの形に歪めた将嗣に、千晶は言い訳がましく口を開いた。

「暑くて汗かいたんだよ。風呂に入って、着替えたいんだ」

嘘ではない。この年の残暑は長く、秋に入ってからでも真夏日が続いていた。スーツを纏った身体は汗じみて、自分でも肌のべたつきが気になる。

目のまえにいる男は、風呂あがりだろうにあまい香水のにおいをさせていた。誰かの移り香ではなく、彼自身が好んでつけるそれは、かつてのパロネスのひとりが、わざわざフランスで調香させたオリジナルのフレグランスだ。いまでは同じ香りを将嗣本人が注文しているらしく、ひと瓶いくらか知らないが、おそらく千晶の月給くらい軽く飛んでいくのだろう。

（すごい違いだ）

地味な仕事をこなし、汗じみた身体を安いスーツで包んだ自分と、あまやかな香りを纏い、朝からセックスをする余力のある男と。

いったいどうしたらこの差は埋まるのだろう。べつにお互いの稼ぎの違いが悔しいのではない。彼とはあまりに人種が違いすぎるのだ。そして、近くにいるだけむなしくなる。

物思いに沈んでいると、くすぐったい感触を覚えた。顎を撫でるのは、将嗣の長い指だ。

「.....なに？」

「だから、なに、じゃねえだろ。いまさらとぼけんな」

あえぐように息をしながら、千晶は背の高い彼を見あげた。身長差はおそらく十センチというところだけれど、身体の大さが違いすぎる。壁に追いつめられたまま、覆い被さってくる男からできるだけ顔を逸らし、薄く嗤った。

「疲れてんだよ。すこし寝てからじゃ、だめか」

「だったらよく眠れるように、もっと疲れさせてやるよ」

逃げた唇を将嗣は追わない。ただ読めない表情でうっそりと笑い、過敏な耳たぶを指でもてあそぶ。ゆるめた襟首にも指を這わせ、浮きあがった首筋のおうとつをなぞるのが卑猥だ。

いやなのに、反応してしまう。千晶の唯一知るセックスは将嗣の施すもので、つまり十数年かけて、この身体は目のまえの男に開発されてきた。

拒みたい。けれど、肉欲に弱い自分も知っている。むしろ焦らされれば、屈辱を覚えつつも泣いてせがむのは千晶のほうだ。

「今日は時間がある。千晶も明日は休みだろ。ひさびさにおまえとするセックスだ、覚悟はいいだろうな？」

声は穏やかなのに、恫喝されているような気分になった。同時に『おまえとする』という言葉にひっかかる自分を知って、千晶は胸が苦しくなった。

「ほかの誰かとは、どうなんだろうな」

自嘲と嘲りの混じったつぶやきは、当然聞きとがめられた。顎を撫でていた指がすべり、千晶の目立たない喉仏のうえに親指が触れる。ぐっとこめられた圧に、冷や汗が背を伝った。

「なにか言ったか？」

「っ……なにも」

ふだんの彼は、どちらかといえば鷹揚で快活なタイプだ。店の若い連中には、畏怖と尊敬をもって慕われ、ひとを食ったような笑みを浮かべていることが多い。

だが千晶に相對するときだけ、その表情は翳る。眼窩の陰が濃くなり、目の奥には読めない闇のようなものが漂う。

怒りや嘲りにも似た強い感情。その意味を読みとろうとする努力はとうにやめた。執着はされているのだろうけれども、愛情と勘違いするには、ふたりの仲はややこしくなりすぎている。

なにより、言葉ひとつ、視線ひとつで自分を意のままにする男のことを、焦がれるように求めているのは千晶のほうだ。

「わかったから。シャワーだけ、使わせてくれ」

あきらめの息をつくのと、頬を撫でてた将嗣がようやく腕を引き、身体を解放してくれる。ほっとしたのが寂しいのかわからないまま、千晶は顔を背け、浴室へと足を進めようとした。だが背後から腰を抱かれ、顎には強引な指がかかる。

「そう、急ぐことねえだろ」

あ、と声をあげる間もなく唇が重なり、すぐに舌が押しこまれた。

煙草の味のするキス。苦い唾液は飲みこむほかになく、絡んだ舌を口腔でもてあそばされると、すぐに腰がひくついた。気づいた将嗣が含み笑い、スラックスのまえを手で軽くはたく。

「んう！」

びくっと肩が跳ねる。喉奥で転がされた笑いが振動となって唇に伝わり、悔しくなる。身じろいで逃げようとするけれどかなわず、しっかりと握られた股間が大きな手のなかで育てられていく。

「ふん。抜いてなかったみたいだな」

ひとしきり口のなかを犯しつくしたあと、将嗣は唇を歪めて笑った。千晶は目を逸らし「そんな、暇がないよ」ともつれた舌でたどたどしく答える。

「暇があっても、すんなっつってただろうが」

「だから、しないっ……し、てない、って」

やわらかく揉みこまれて、完全に勃起した。将嗣はそれをおもしろそうに眺め、ぎゅっと強く握ったあと、強ばったそれを手のひらから解放する。

性感を高ぶらされたのはペニスだ。なのに、じりじりと炙られたような感覚が去らないのは腰のずっと奥のほう。性器への愛撫は、このさき訪れる挿入と蹂躪に直結している。

「……王将」

名を呼ぶと、なにか気に入らないことでもあるかのように、彼は片方の眉をあげた。そして千晶の小さな尻をきつく掴み、一度だけ縫い目の奥へと指を食いこませ、また放り出した。

「風呂、さっさと行ってこい」

無情な言いつけに、従順にうなづく。見おろしてくる将嗣の目を見ることは、とてもできなかった。この程度の悪戯で興奮する千晶をあざ笑うような、冷たくあいまいな笑みを浮かべているだけだからだ。

意地悪く高められた身体を引きずり浴室へ向かう。快楽の期待に火照った身体がよるめきそうになるのをこらえ、必死に歩いた。

(最低だ)

服を脱ぐだけで、肌が痺れた。高ぶらせて放り出すのは、シャワーの水流が肌を叩くことすら、過敏な身体には前戯となると知ったうえで将嗣の意地悪だ。じりじりとした気分を味わうことで、もう将嗣とのセックスははじまっているのだと、思い知らされる。

シャワーに打たれながら、千晶は自分の肩を自分で抱いた。ムードもへったくれもない、どころか愛情すら感じられない戯れにさえ、あっけなく疼き悶える身体が情けない。

けれど、彼が目のまえにいてだけで、千晶はもう、たまらなくなる。将嗣は千晶にとって、セックスそのものだ。どうしてそんなふうに過敏に反応してしまうのか、わからない。彼とは、身体の関係以外になにひとつ結んでこなかったからかもしれない。

いっそ心はかけらも伴わない、性の奴隷であることに溺れきってしまえば、楽だったのだろうに。

「千晶、早くしろ」

「……わかってる」

磨りガラス越し、待っていると告げる男の居丈高な声。腹立たしく、忌々しい。屈辱も感じるし惨めだと思うのに、命じる声に抗えない。

低くあまい、あの声を、いとおしいと感じてしまう自分が、本当にばかすぎて、笑えた。

裸のまま寝室に入ると、ものも言わずに腕を掴まれ、ベッドに押し倒された。

覆い被さってくる男の、整髪料と煙草の入り混じったにおいが鼻腔をくすぐる。そこにあまったるい香水のにおいが混じらないことに、すこしだけ安堵している自分が哀しかった。

会話は、なにもない。ただ口づけをうけ、肌を、敏感な突起を、剥きだしになった粘膜をいじられ、脚を開かされる。

「ぼうっとすんなよ」

「……っ」

濡れた指が尻の奥を探り、二本の指で無造作にそこを開く。先端が細くなったジェルボトルのさきを押しこまれた。

「い、や……っ」

ぬめった音を立て、ジェルが流しこまれてくる。室温と変わらないほどにはぬるいけれど、体内にはやはり冷たく感じるこの瞬間が、千晶は苦手だ。

（気持ち、悪い）

ぶるりと震えると、摩擦であたためようとするかのように乱暴に指が押しこまれた。

おざなりといってもいい、愛撫にもならないそれでも、千晶の身体はもどかしく震える。

「こんなんでも感じるのか、おまえは」

誰がこんな身体にした、という言葉は呑みこみ、喉奥であえぎを噛み殺した。

目は開けない。ただくちやくちやくと体内をかきまわす指の動きに集中していれば、すくなくとも快楽は得られる。

（今日は、入れるの早いな）

ということは、さして機嫌が悪くないらしい。

将嗣はなにか不愉快なことがあると、セックスがしつこくなる。おまけに延々と続くので、千晶はときどき、本気でやり殺されるのではないかと考えることすらある。

怯えると同時に、それなら、それもいいかと、どこかであきらめていた。もともと彼のオモチャとしてしか必要とされていない身体だ。使い捨てられるのも道理だと、投げやりに納得する自分がいた。

セックス以外の時間にも、そうして自分を捨ててしまえば、楽なのだろうけれど。

「千晶」

呼ばれたのは、目を開けろという命令だ。瞼をゆるやかに開くと、きつくつぶっていたせいで潤んだ視界に、男の顔が映る。

目尻がほんのすこし下がった、くっきりとした二重の瞼。いつも笑っているような顔をしている男は、千晶のまえでだけはあまり笑うことがない。

冷たく睨むように見据えられ、無表情に見つめ返す。近づく距離にも、目を伏せはしない。将嗣が見ていると言うのなら、それに従うだけだ。

「……んんっ！」

口づけを受けたと同時に、いきなり太いモノが押しこまれた。一瞬の衝撃に呻くけれど、慣らされた身体は熱の楔をやすやすと呑みこみ、嬉しげに収縮をはじめてしまう。

「相変わらず、よく食いつく」

下唇を噛んだ将嗣は、シャツすら脱いでいない。ボトムのファスナーを開き、必要な部分だけを取りだして、全裸の千晶を静かに犯す。

即物的で情緒もなにもない、一方的なセックス。それでも千晶の全身は燃えるように熱くなり、突きこまれる欲情を嬉しがっている。

「ん、んふ、ううう、うっ」

ぎしぎし、ぐちゅぐちゅという音のほかには、ひとりぶんの押し殺したあえぎと、ベッドのスプリングが軋む音しか聞こえない。ぬかるんだ肉をかきわけ、開き、ずるずると行き来する遅いそのことしか、考えられなくなっていく。

「……風呂の間、勃ちっぱなしだったのか」

「いたっ！」

はしたなく強ばった性器を、長い指がぴんと弾いた。将嗣の身体の動きにあわせ、ゆらりと揺れる細身のそれは、粘ついた体液を滲ませながらひくついている。

「千晶、こすってほしいなら、そう言え」

「こ、こすって……っ、あ、うああ、や！」

ねだらせておいて、将嗣はこするどころか、握りつぶすような勢いで手のなかにそれを捕らえた。圧迫感に、射精欲求を煽られていたペニスが痛み、そのくせ指の端からあぶれた先端には、とろとろと透明な雫が滲んでいく。

「い、痛い、いたってっ」

「ああ、悪いな。ひさびさなんで、加減を忘れた」

喉奥で笑い、ふっと手の力を緩められる。どっと流れた血流に痺れが走り、さらに敏感になったそれ

を、今度は羽がかすめるような力でもどかしく刺激された。

千晶は呻きながら腰を振る。小さな尻は震えながら浮きあがり、すでに将嗣の楔が打ちこまれた場所を起点にして、ぐねぐねと淫らに蠢いている。

「もっと腰、突き出せよ。手が届かねえ」

「ひっ……ひ、あっ」

いたぶる言葉をかけられながら、緩く輪になった手のひらのなかへと自分の性器を届かせるため、必死になって腰を振る、そのみっともない様を、男はおもしろそうに睥睨した。

将嗣が千晶をなぶるやりかたは、いつもこうだ。子どもが蝶の羽をおもしろがってむしるように、残酷な喜びを滲ませた目で、隅々までを観察する。

「もっとだよ。しごいて欲しけりゃ、ちゃんとケツ振れ」

「や、やって、る……っ」

わざと焦らすやり口に、惨めさを覚える。同時に妙な興奮も襲ってきて、そんな自分が疎ましいと千晶は唇を噛み、卑猥にもほどがある角度に腰を突き出した。

「いい格好だ。そのまま、脚踏ん張ってろ」

「え、あ……っ、あ、あああ、あああ！」

腰を浮かせた状態のまま、いきなり激しく突きあげられた。もどかしく焦れていた身体に訪れた、強烈すぎる刺激に悲鳴をあげて悶える身体を、強く押さえつけられる。自分の荒れた息がうるさい。おかげで、相手が興奮しているのかどうかなど、まったくわからない。

「い、やだっ、やっあ、ああ！」

「なんで逃げる。してほしかったんだろうが」

笑いを含んだ声が、ぬろりとした感触とともに耳に吹きこまれる。ぞくぞくと震え、無言でかぶりを振ると、手にしたものをさらに複雑にもてあそばれた。

「ひう、うう、うう」

「声噛むなよ」

うなずいてみせるけれど、声は出せなかった。反抗しているわけではなく、深く入りこんだ将嗣のそれがすすすぎて、喉が痙攣しているせいだ。

目があって、ぞくりと千晶は震えた。冷徹な視線が、打ちこまれた楔よりなお深くを暴き出す。身体のみまで見通すような目に怯え、とっさに顔を逸らすけれど、将嗣は笑うばかりだ。

「いやそんな顔するくせに、濡れ濡れだな」

「い、いやじゃ……」

「ないのか？ じゃあ、好きなんだな、これが」

「んん！」

ゆるゆると浅い部分を穿っていたそれを、一際強く打ちつけられる。強烈な刺激に眩暈がして、ひと突きごとに理性が打ち砕かれていく。

いたぶるような抱きかたに、苦しさや哀しみがこみあげる。機嫌が悪くないと感じたのだが、違っていたのか——いや、それとも。

（もうお互い、相手の気持ちなんかわからないのかもな）

自嘲混じりの笑いが、突きあげられ力なく揺れる顔に浮かぶ。

それ以前に、将嗣の気持ちがわかったことなど、千晶にあっただろうか？

「千晶、ぼうっとすんなっつってんだろ」

「うぐっ……お、王将、もっとゆっくり」

きつく責められ、哀願まじりに名前を呼ぶ。だが彼はますます機嫌を降下させ、呻いた。

「そっちで呼ぶな」

彼は、千晶が源氏名で呼ぶとひどく不愉快そうに顔を歪める。人生のうち、もう半分近くをその名で過ごし、いまでは本名のほうを知る人間のほうがすくないのに、そして彼自身、『柴主将嗣』であることに、なんのこだわりも持っていないはずであるのに、だ。

「……将嗣？」

呼びかけると、ほんのすこしだけ彼は唇をゆるませた。広い肩を覆っていた威圧感がやわらぐのを知り、千晶は不思議になったが、その感情をまともに分析するより早く、きつい突きあげをくらい、悲鳴をあげる羽目になった。

「もう逃げようなんて思うな、千晶」

「んっ、ん……っ」

「別れるだのばか言ったら、またこの間みたいに犯すからな」

言われて、びくっと身体が引きつった。無言で震わせた唇を、将嗣の指がたわめるように撫でていく。

千晶は胸をあえがせ、必死に声を絞り出した。

「あ、あのとき、誰がいたんだ」

「いねえよ？ 誰も見てねえし」

嘘だ、という言葉は声にならなかった。追及したところではぐらかされるのがオチだし、そもそも彼が認めようと認めまいと、あのときの自分はたしかに誰かの気配と視線を感じた。

いまさら取り返しのつかないことでなじっても、さらなる反撃が待っているだけだ。

「だいたい、見られたからなんだ？ おまえだって、よがってただろうが」

「それはっ……」

セックスに弱いのは、それがどんなにいたぶるような抱きかたであったとしても、そのときだけは求められていると実感できるせいでもあった。けれど、それを目のまえの男に言ったところで通じないし、千晶自身、そんな情けないみじめなことを口にしたいくもない。

複雑な内心を知ってか知らずか、将嗣は低く嗤う。

「どっちでもいいさ。同じことだ」

誰かに見られても、見られていなくても、千晶が別れると言っても、言わなくても、

「——おまえは、俺のだ」

薄暗い嗟い混じりのつぶやきのあと、唇が重なった。さきほどまでの快楽を煽り奪いとるためだけのそれではなく、なにか感情を含んだような口づけに、千晶は目を閉じた。

以前の将嗣はもうすこし——ふたりきりのときやセックスの際に限って、だが——やさしいと感じられる態度もとった。けれど千晶が別れを口にできるようになってからは、サディスティックな気配は回を追ってひどくなっている。

どっちでもいい。つまりそれを執着ととるか、意に逆らう相手への不快感ととるかは千晶次第、ということだ。そして千晶は考えることに疲れていた。

(考えても、しょうがない)

思考を放棄して、揺れる腰の奥に伝わる振動だけに神経を集中させる。こっけいに揺れる細い脚の内側、逞しい身体を挟んだ腿がこすれ、摩擦に熱くなった。

「いくか？ ん？」

低い声にそそのかさされ、こくこくとうなずいて背中にしがみついた。たぶん、あと三度ほど突きいれられたら、射精するだろう。タイミングすら計れるほどなじんだセックス、けれど倦怠の近づく余地はない強烈な悦楽に、喉が震えた。

「あ……」

肌を重ねるのも、習慣と淫楽のための行為でしかない。あるいははげ口、その程度の扱いを十二年も続けてきて、感情はすでにすり切れた。

抱きしめられるだけで血がたぎるような興奮も、肌が切れるようなせつない痛さも寂しさも、すっかり薄らいで久しい。

それでも、長いこと一緒にいた。そばにすぎた。抱きあうたびにまじりあう身体はきつと、どこか一部が癒着してしまっていて、引き剥がせば血を流すに違いない。

疲れた心と、同じように。

\*\*\*

窓の外には、道行くひとびとが蠢いていた。

この日、千晶が大学時代の先輩に呼び出されたのは、新宿ではなく渋谷のセンター街に近い店だった。地上からずいぶん高さにあるビルの喫茶店は、そこそこにぎわっている。

ガラス窓の向こう、眼下にあるのは都会の街。日曜だからか、とくに混み具合の激しいスクランブル交差点。せわしなく行き交う人間たちはアリの群れにも似て、不規則なようできて、どこか法則的にも感じられる。

それらを見おろす千晶の横顔には、表情がない。

無心というよりうつろな目で、ぼんやりと外を眺めていた千晶に、ほがらかな声がかかった。

「柳島、ごめん、ごめん。待った？」

「いえ、大丈夫です」

からりと笑って、長身の男が近づいてくる。ひさびさに顔をあわせた先輩、松山春重は、相変わらずの飄々とした雰囲気身を纏っていた。

「ごめんね、新店の打ち合わせのついでだったんだけど、長引いた。休みの日なのに、呼び出して悪いね」

「クライアントのご要望なら、文句は言いませんよ」

スーツ姿にブリーフケースを手にした彼は、かなり急いでやってきたらしく、軽く息を弾ませながら向かいの席に座った。こちらは私服姿の千晶がやんわり微笑んで返すと、目のまえの男は聞いているのかいないのか。「その水ちょうだい」と言うなり、千晶のまえにあったコップを勝手に奪い、ぬるくなった中身を一気に飲み干した。

「……つぶあ、生き返った」

「お水、待てなかったんですか？」

千晶がぐすりと笑うと、春重は「うん」と子どものように笑った。

「朝からろくに水分補給してなくてね……あ、コーヒーひとつね……打ち合わせ、雰囲気悪くてさあ。お茶は出てるんだけど、茶あする空気じゃなかった」

通りかかった店員に手をあげて注文した春重は、長い脚を軽く組み、ネクタイをゆるめた。その姿にすっかり見惚れた店員が、あわててオーダー票を書く姿に千晶は苦笑する。

（どこまで計算なんだか）

学生時代、雑誌モデルだった春重は、端正な顔に長身、やわらかくきれいな笑顔と、ルックスだけなら非の打ち所のない美形だが、発言や態度がコミカルで、それがひとをなごませる。

笑顔は、彼の歳の離れた弟によく似ている。邪気がなく、人好きがするあまい顔だ。もともと弟と違って、春重の表情はあくまで無邪気に『見える』だけのことだが。

「新店、大変なんですか」

「んー。コンセプトはプチホストクラブ、って感じのイケメン飲み屋なんだけどね。仕入れの業者さんとの価格設定が難航して。ま、最終的にはお互い条件飲んだけど」

ごそごそと春重が取りだした企画書に、千晶はざっと目を通した。

時間単位制でテーブルにキャストがつくことはできるが、指名はできない。そのためサービス料はなし。チャージ料はドリンクやフードに含まれるため、多少は一般の飲み屋より高がつくが、それでもかなりリーズナブルなボイスバーのようだ。

「ずいぶん、ふつうの店ですね」

新しい店はてっきりメンキャバ——要するに男のキャバクラだ——かと思っていたが、予想より健全な、あくまで『イケメン揃いのレストランバー』らしい。意外だと声に出すと、春重が補足だけど、と語り出した。

「いまの『バタフライ・キス』は完璧に定番のホストクラブだろ。それはそれで、うちのグループの中核になるものだし、優良店として売り上げも上々だし。けどね、風営法きつくなつたからさ、しょせん夜の店は夜の世界でしかまわらなくなってるわけ」

「夜の世界で、ということ？」

「最近ますます法律厳しくなったの。一部営業だけでもすんげえ規定細かくなってるし。老舗のクラブにも、最近ガサいれ入ったらしい。つっても優良店だから問題なかったけど」

テレビのコメンテーターにもなるようなホストクラブオーナーが、見せしめに引っぱられた件は千晶も知っていた。

風営法と略される『風俗営業等の規制及び業務の適正化等に関する法律』により、キャッチ禁止、営業時間の限定など、法規制は年々きつくなっている。

「……そんなこんな、お達しが厳しいから、けっきょくお客さんは一般人の女性つうより、キャバ嬢とかのほうがメインなんだよ」

深夜一時から夜明けまでの営業を禁止されているため、ホストクラブやキャバレー等では夕方から深夜までを一部、早朝五時ごろからの通称『日の出営業』を二部として営業する。必然的に、二部には仕事あがりのホステスらしき来店しないということになる。

「まあ、遊びかた間違えたお嬢ちゃんがへたに借金作ったりするより、プロ同士じょうずに遊ぶほうが、それはそれでいいのかもしれないって俺は思うけどね」

ひとりのホストブームもおさまってきて、カネの流れがもとに戻っただけのことだ。

語る春重は、どこかのんびりした語り口ながら、目は厳しいものをたたえていた。

「で、近年はメイド喫茶の男版みたいなコンセプトカフェも増えてるだろ。なら俺らのノウハウと人脈でシロウトさん向けの店作ろうとね」

「ははあ。そりゃガチですね」

春重は役職の名称こそ『バタフライ・キス』のフロアマネージャーだが、実質は将嗣と共同で経営に携わっている。経営しているのは、ホストクラブ一店舗だけではない。グループ店となる居酒屋などの飲食店に、『王将』の名をうまく活かし、関連業種のプロデューサーとしても名を馳せ、たとえばラブホテルのプロデュースなどというものも手がけているようだ。

異色なところでは、自分でスカウトしたホストやモデルらを起用したファッション誌『メンズ・ショット』ほかも立ちあげた。メイン専属モデルは彼の弟でもある松山一路だ。

数年まえから、一部の若人のファッションリーダーとしてキャバ嬢やホストが注目されるようになり、ファッション誌もそれ専門のものがいくつかある。将嗣と春重が企画した『メンズ・ショット』はそのなかでもかなり人気があるものだ。

まだ二十二歳の一路は二十歳になるなり『バタフライ・キス』のイメージモデル兼ホスト、『イチロ』として働いてきた。だが、もともと『メンズ・ショット』での彼の人気を利用した看板キャラクターでしかなく、ホストらしい接客はほとんどしていない。

「一路も、モデルのほうでけっこう人気出てきたからさ。あんま、裏のにおいがする仕事はさせたくないのね。だから、グループ全体の看板息子ってことにして、イメージキャラクター的に使ってくほうが

いいかなと」

「ああ、でも一路なら、そっちのほうが向いてるかも」

一路は兄の春重よりさらに背が高く、抜きんでてきらびやかなルックスながら、性格は穏やかで気のやさしい青年だ。春重は相当な兄ばかだと思いが、どことなく雰囲気がかわいらしいので、猫かわいがりしてしまう気持ちは千晶にもわかる。

「日の当たる仕事のほうが、たぶんあの子には向いてるでしょう」

穏やかに千晶が告げると「そうだね」と兄の表情で春重は微笑んだ。

「ま、そんなわけですね。またホームページ作成の依頼を、と思ってるんだけど」

さらにごそごそと資料を取り出そうとする春重に、千晶は眉をひそめた。

「系列会社にデザイン事務所もあるんでしょう？ そっちに頼めばいいんじゃないですか」

「あれは雑誌とフライヤー専門なの。……でも、いやなら無理しなくてもいいよ。どうしてもだめっていうなら、しかたない」

「いやならいいんだけどって、だったら言わなきゃいいじゃないですか」

あざとい物言いだ、その言いかたはずるくないか。苦笑した千晶が指摘すると、春重は微笑んだ。

「日本人的な押しつけ方法だろ。下手に出つつ相手の良心につけこんで、やんわり通しちゃう」

「ネタばらししてどうすんですか」

失笑すると「まあまあ、とりあえず聞いただけ聞いて」と春重は書類を取り出す。やわらかい押しの強さは学生時代からなにも変わらず、呆れながらもつい笑ってしまった。

「とりあえず、飲み屋のインフォメーションサイト作ってよ。ロゴとか写真とかは、デザイン部門からデータ渡すんで、サイトの構築だけしてくれば、更新管理は社内でする」

差しだされたのは、すでにプレオープンに向けて稼働しはじめている店の企画書だ。「わかりました」とうなずいて書類を確認していると、春重が「あのさ」と問いかけてきた。

「あと、ページ単価は毎度のでいいわけ？ もうちっとあげてもいいんだけど」

「友人の手伝いって名目なんで、いつもの値段でいいですよ。確定申告面倒くさいし」

千晶の返事に、春重は「欲がないなあ」と呆れたように言った。そのあと、企画書の概要を確認する千晶に、のんびりとした声で言うてのける。

「あいつは、WEB部門に関しては、柳島がうんって言えば、すぐにでも作る気らしいけど？」

ちらりと含みのある視線を向けられ、千晶はうつむいた。すでに何度も提案された事項を、無言のまま受け流した後輩に、春重はため息をついて腕を組む。

「柳島さあ、通販会社のシス担なんかやってたって、さきは見えてるだろ。会社に隠れて内職するんじゃないくて、専任になってくれると助かるんだけどなあ」

「それでも、あっちが俺の本業です。『バタフライ・キス』の仕事はあくまでアルバイトってことで、不定期にお引き受けしてるだけだって、まえにも言ったじゃないですか」

かたくなな表情で言い張ると、春重はため息をついた。

「柳島はプログラムも書けるしWEBデザインだってできるんだから、その気になればもっといろいろできるでしょ。フリーになったっていいんだし、うちなら、おまえのいいように会社作れるよ？」

今後、飲み屋のチェーン展開も考えてるから、仕事はいくらだってあるし。説得しようとする先輩をまえに、千晶は目を伏せ、かぶりを振ってみせた。

「そういう話じゃないんです」

「じゃ、なにが不満なわけよ」

「愛人に仕事世話する発想そのものがいやなんですよ」

ずばり吐き捨てるように告げると、春重はやれやれとため息をついた。

「あのさあ、おまえ——」

なにかを言おうとしたらしく、身を乗り出した彼は、しかし店員がコーヒーを運んできたことで黙らざるを得なかったようだ。

どこにでもある喫茶店の、うまくもまずくもないコーヒーをひとくちすすり、店員が遠ざかったのを見計らって春重は口を開いた。

「愛人てさあ、あいつ奥さんいつの間にこさえたの。十二年も彼氏やってて、同棲までしてんの、柳島だろ」

「そういう意味じゃないのはわかってるくせに」

「頑固だね、おまえも」

千晶がかすかに微笑むと、ひどく冷たい印象になった。心まで冷えきっているとわかる、疲れの滲む表情に、春重はやれやれとため息をつく。

「……ま、それはともかく。飲み屋のほうについては書類に概要があるけど、ちょっと見てくれるかな」

不毛な会話と知ったとたん、春重は頭を切り換えたらしく、ビジネスライクな口調で段取りと企画書の補足をいくつか説明しはじめた。

「トップはフラッシュ使って。素材の写真は渡すから、いつもどおり、そっちで加工してくれると助かる。イメージカラーなんかも書類にあるとおりでけど、なんか質問ある？」

何度か請け負っていた話と大差はなく、サイトデザインと構成を考えれば問題はないと判断する。千晶が「とくには」とかぶりを振ると、彼はスケジュール帳を取り出した。

「んーと……じゃ、来月までに下案くれると助かる。プレオープンまでにサイトの稼働間に合わせたいのね。柳島仕事早いから、毎度の突貫工事で悪いんだけど、メ切とかこれで平気？」

提示された期日は、ぎりぎり辞令の日程まえだ。大丈夫だろうと判断し、千晶はうなずいてみせる。

「平気もなにも、やるしかないんでしょう。先輩の突発の依頼にはもう慣れてますから。写真とかの素材、早めにもらえれば問題ないです」

「悪いね、毎度。頼りにしてるし。ほかにも企画あるんで、次の依頼についてはまた今度」

笑いながら拝んでくる春重が、なにげなく口にした『次』という言葉に一瞬千晶は惑った。そしてしばしの逡巡ののち、口を開いた。

「次って、いつごろでしょうか」

「え？ まだ確定はしてないけど、たぶん数カ月後にイベントがあるから、インフォメーションサイトをもっと——」

春重は途中で言葉を切った。形のいい眉を軽くひそめ、小首をかしげてみせる。

「なんかあんの？」

身を乗り出すようにして問いかけてくる彼に、一瞬ごまかそうかと思った。けれど聡い春重相手に通用するほど千晶は口がうまくなかったし、へたな嘘をついても意味はない。

「WEB関係の依頼は、受けられるとは思いますが。でも、いままでみたいに、こうして打ちあわせたりとかがむずかしくなるかもしれない。会社、忙しくなるんで」

「うん、だからさ。なんで忙しくなるの？」

春重は、あえて穏やかに粘ってきた。通り一遍の返事ではやはり無理なようだ。千晶はすこし視線をずらし、事実だけを述べた。

「いま勤めてる会社、再来月に移転するんです。引っ越し作業があるし、それに伴った異動もあって、昇進になるんです」

淡々とした声で話す千晶の『昇進』という話には、春重は祝いの言葉を口にはしなかった。ただ、いつも笑っているような顔を引き締め、唇を強ばらせる。

「どこに引っ越すの？」

「……山梨県ですね。倉庫とオフィスの家賃つか、経費がもう、まかなえなくなってるそうで。山梨には、昔、会社の倉庫用に買った土地で放ってあったのがあるらしいんですよ」

千晶が口にした笑い話に、春重はにこりともしなかった。ふだん、穏和な表情をしていることの多い彼だが、そういう顔をするともとの造りのよさが際だつ。そのぶんだけ、剣呑な迫力も増した。

「知ってます？ 最近、都内の会社の電話サポートとかも、沖縄とか遠方で受けることも多いんですよ。おかげで、土地鑑のないサポート嬢がとんちんかんな返事するトラブルもあるらしいですけど——」

「で、おまえはそれ、あいつに言ってないわけだ？」

話を断ち切った春重に千晶は口を閉ざし、すでに冷めきったコーヒーをすすった。

「いつ決まった？」

鋭い声に、「辞令が下りたのは、先週の話です」と淡々と答える。

「誰が書類の話しろつったよ。移転の話自体はいつ決まったかくらい、知ってんだろ」

「まあ……俺ら平社員の耳に届いたのは、半年近くまえ、ですか」

春重はいらだつたようにスーツのポケットから煙草を取りだしかけ、店内禁煙の文字を見つけて舌打ちをした。

「くそ。どこもかしこも禁煙って、やりづれえな」

「この機会に禁煙されたらいいがです？」

さらりと言うと「できりゃ苦労しないよ」と春重は肩で息をした。

「んで？ おまえら、その半年間なに話してたの？」

「会話なんか、ろくにありませんから。だいたい、あいつが家に戻るのなんか週に一回あるかないかだし、俺もこのところ、会社の仮眠室に寝泊まりすることが多かったんで」

顔をあわせるのは月に一度あるかないかだと答えると、春重は眉間に皺を寄せた。

「おまえらさあ、その状態っていつぐらいから？」

「さあ……もう、覚えてません」

そもそも、社会人になってからというもの、まともに会話をしたことなどあったらろうか。店を立ちあげたころも、それ以前からも将嗣は多忙を極め、ひどいときには数カ月、自宅に戻らないこともあった。

学生時代には、店の開店資金を稼ぐために、大学そっちのけでホストの仕事に精を出し、けっきょく二

年も留年する羽目になっていた。

そして、そのせいで本来ならば二学年下の千晶と出会ってしまった。

ずきりと、過去の痛みが胸を焼く。いつまで経っても苦く重苦しいこの感情を振り払うように、千晶は軽く息を吐いて笑ってみせた。

「王将が忙しいのは、桧山先輩がいちばん知ってるでしょう」

「まあ、そりゃそうだけどさ。あいつ店にいても、年がら年中電話か打ち合わせだし。でも出張関係は、かなり俺に任されてんだけどなあ」

そんなに自宅に戻っていないとは思わなかった。つぶやくように言った春重に、口にするまいとしていた言葉がこぼれていく。

「あいつが外泊するなんて、めずらしい話じゃないですし。あのマンション以外にも、部屋、いくつか持ってるでしょう」

「あ？まあそりゃ、あるけど――」

なにげなく答えようとした春重は「あ」と目をまるくした。

「なるほど。それで愛人。ほかの部屋に誰がいるんじゃ、とか考えてるわけだ？」

千晶が薄く嗤うと、春重は呆れたように目をしばたたかせた。

「ちょっと柳島、それ被害妄想きわまってない？いまのあいつ、そこまで暇じゃねえし。そもそも部屋があるのは、ぜんぶホスト連中とか店員の寮で、たまに仮眠に使ってるわけさ」

「.....知ってますよ」

千晶の浮かべた笑みの意味には気づかないのか、春重はなおも説明しようとする。

「本店のルーク（ナンバー2）の勇気だって、まだ寮にいるくらいだし、将嗣の動向なんか調べりやすくに」

「ええ、だから、知ってるんですよ」

千晶は苦笑した。そして、歌謡曲や演歌に出てくる嫉妬深い女のように、むやみに不安になっているわけではないとかぶりを振る。

「あのですね、王将が――将嗣じゃなくて『王将』が、どうやってあの短期間に、太客掴んで金貯めたのか、その客をどうやって虜にしたのか、俺、ぜんぶ知ってるんですけどば」

「知ってるって、だからそれは」

彼がどうにかフォローをいれられないかと頭を巡らせるまえに、千晶はさばさばと言った。

「いまさらだけど、ぶっちゃけますね。あいつが女とやってるとこ、直に見たの一回や二回じゃないんですよ。堂々、いっしょに暮らしてる部屋に連れこんでましたから」

うっと春重がつまった。ぐうの音も出ない話に、彼は顔をしかめている。

「それは.....あのころは、仕事だったからで」

「そうですね。それがいやならホストとなんかつきあえない」

わかっているとうなずくと、春重はなんとも言えない顔をした。千晶よりよほど饒舌な彼が言葉を探す羽目になっているのが、こんな状況だというのに、おかしかった。

「でもね、それこそ日本的な押しつけ方法なんですよ。こっちが強く言えないのをわかってて、開き直って『いやならそう言え』って言われたら、ふつうの日本人は文句言えません。まあそれ以前に、あいつ相手に言っても無駄だってあきらめましたけど」

さきほどの軽口を逆手に取られ、春重は黙るしかなかったらしい。

「だいたい、俺がなんか文句言うでしょう。で、不満があるならかわいがってやるって、なにをすると思います？」

「聞きたくないけど一応、なに？」

「こっちがぶっ倒れるまでやりまくりますよ。ほんと、あの体力にだけは感心しますけど」

春重は、さすがにいやな顔を隠せなかったようだ。

別れ話を切りだしたあとのセックスは、ほとんど拷問じみている。あげくぼろぼろになった千晶が泣きながら「そばにいる」と口にするや、仕事だと言い放って女のところに機嫌を取る電話をかけるのだと補足すると、彼はますます顔を歪めた。

「先輩だって、まったく知らなかったわけじゃないでしょう。大学のころ、俺、何度か体調不良で学校行けなかったし」

指摘すると、春重は気まずそうな顔をした。

「あー、その。あのころは若気の至りかと思ってたけど、まさか.....」

「あのころから変わってないです。逃げたらセックスで屈服させられる、同じパターンの繰り返し。俺はそれ、二十歳からずーっと耐えてきましたけど、まだ我慢しないとダメですかね」

「いや.....」

あけすけな告白に、春重はかなり動揺しているようだった。さきほど喫煙できないとぶつくさ言ったばかりなのに、また煙草のケースを取り出そうとしては舌打ちしている。

気まずそうに煙草をしまいながら、春重は千晶の顔を見ずに言った。

「柳島さあ、俺にここまでぶっちゃけるってことは、ほんとにもう、終わりにする気だろ」  
苦い声で問われて、千晶は答えなかった。そもそも、終わるようななにかがあるとさえ、思えなくなって久しい。視線を落とし、薄く唾うだけの千晶に、春重は痛ましいと言いたげな目を向けた。

「言い訳にもならんけどさ、『バタフライ・キス』ではイロコイと枕は禁止にしてる。あいつ自身が、あんまりそういうの好きじゃなかったからだっていうふうには、思ってるやれな？」

「最初にそのこと言いたしたのは、先輩のほうだって俺が知らないとでも？ ついでに言うと、それ、一路のためでしょう」  
今度こそ言葉がなくなったようで、春重は「お見通しかよ」と力なく笑った。

ホストクラブのマネージャーなどをやっても、春重自身はホストとして店に立ったことはなく、どんなに勧められてもあくまで裏方に徹していた。

華やかな世界にいて、身を持ち崩さないでいるのは相当の自制心が必要だ。そして春重は、この業界において数すくない、しっかりと自分を律することができるタイプだ。

だからこそ千晶は、彼を信用していた。将嗣の親友でありながら、あの強烈な男に心酔もせず、影響を受けるでもなく、淡々と仕事のパートナーでありつづけることは容易ではない。

「でもさあ、王将が現役ホストだったの、もう何年まえの話なのよ。あいつ大学出ると同時に店のオーナーになったんだから、ええと——」  
彼は指折り数えて、「十年か」とひとり納得したようにうなずいた。

「十年もまえのこと、いまだに根に持ってるなら、なんでつきあってんの？」  
「惰性でしょうね」  
きっぱり言いきると、さすがに春重はのけぞった。そしてまじまじと、千晶の顔を眺める。

「なんですか」  
「なんか柳島、きつくなった？ 俺の知ってる後輩ちゃんじゃないみたい」  
「三十にもなりや、強くもなります」  
笑いながら告げると、春重はため息をついた。

「んで、なに？ もしかしてその、移転の話、俺には黙っててくれとか言う？」  
「いえ、いいですよ、言っても」  
「……いいの？」

意外だというふうには、春重は目をみはった。うなずいて、自暴自棄の表情を隠さず、千晶は言った。

「そうでなくても、薄々勘づいてると思います。この間、別れ話切りだしたら、店でしこたまやられたんで」  
吐き捨てるような千晶の声に、春重は「……え？」と固まった。

「たぶん、誰か店の子にも見られたと思いますけどね、おかまいなしですよ。目隠しされたまま、こっちの腰が立たなくなるまでお仕置きされました」  
「は!？」

春重があわてたように腰を浮かせ、長い脚がテーブルに当たった。がちゃんとコーヒーカップが音を立て、その音に我に返ったように彼はふたたび腰をおろした。

「い、いつの話、それ……」  
「つい最近。先輩、新店の話のせいで、あんまり『バタフライ・キス』にいなかったでしょ」  
うわあ、と春重は頭を抱える。うんざりとした表情に、こういうところはさすがに常識人だなと、まるで他人事のように千晶は考えた。

春重は両親を早くになくし、施設入りも検討された年の離れた弟、一路を育てるため、高校生のころからモデル業を勤め、将来に対してのノウハウを身につけながら奨学金で大学に通ったと聞いている。そこそこ遊んではいたようだが、恋愛についてもごく一般的な常識や感性を失ってはいない。それはおそらく、弟を育てる責任感も作用していたのだろう。

「キツイ話聞かせちゃって、すみません」  
「いやまあ、うん。知っちゃいたけど、……またかよ」  
「え？ またって」

妙な含みを感じて問えば、「いや、なんでもない」と春重はかぶりを振った。

「しみじみあいつもあほだね、と思っただけ。ほんとに、なんだかなあ」  
気を取り直そうというのか、顔をしかめた春重は眉間を長い指で揉んだ。あほ、という言葉に苦笑してうなずこうとした千晶に、春重は長い息をついてかぶりを振る。

「そんだけ逃がしたくないのに、なんでいじめるかな。俺にはわからんけど」  
「さあ……もう、王将については考えることはやめましたから」

つぶやいた千晶の声は冷めきっていた。ふと春重は視線をあげる。なんですか、と首をかしげると、彼は小さくうなずいた。

「うん、いや、柳島が冷めすぎてるせいもあるのかなあ、とかちょっと思った。もともと冷静だったけどさ、なんか投げやり？」

答えず、千晶はまた薄く嗤った。愚問だったかと、またため息をついた春重は、しばしの沈黙のあとぼつりと言った。

「あのね、あいつは頭と心が複雑骨折してんだよ」

「屈折じゃなくて？」

「うん。骨折。つながってないの。わりとなんでも、ソツなくやりこなせちゃうもんで、余裕こいてると思われてるんだけどね。ほんとは案外、単純なことしか考えてないよ」

どんな、と問いかけるよりさきに、春重は言葉を続けた。

「金持ってなかったんで、金が欲しい。店はせっかくならでかくしたい。野心家っちゃあそうだし、俺もそこんところは同じだけどね。てめえが表に出るより、補佐やるほうが向いてるんで、お互い需要と供給が噛みあってるけど——って、こりゃ、いまは関係ないか」

自分語りしてどうする、と苦笑した春重は、すぐに真顔になった。

「いまね、王将、仕事すっげえ広げてんのね。飲み屋のチェーン展開と、雑誌も別冊立ちあげるし、それに伴ってデザイン会社も作った。ほかにも、新宿に花屋と、夜半受け入れOKの歯医者とかさ」  
思っていた以上に手広い事業展開に、千晶は「そうなんですか？」と目をまるくした。

「うん。ぜんぶ夜の商売に関わってくる仕事だろ。業者とあれこれやりとりするより、まとめてぜんぶ牛耳っちゃったほうが話早いだろって、そういう発想だけだ」

雑誌はインフォメーションとイメージアップに、花屋はむろん、客へのプレゼントやその他に欠かせない。歯医者は、ルックスを気にする夜の世界の人間にとって、こまめなホワイトニングケアをするためにも必要だ。

「どれも『バタフライ・キス』を中心にしたプロジェクトだけど……正直、女落とせばいいだろう的な、前時代的なホストやってたって、さきはそう明るくない。もっとエンターテインメントな産業にして、クリーンなイメージ打ち出さないと厳しいわけ」

「だから、飲み屋？」

あくまでフードとドリンク主体、ルックスのいい店員を揃えて女性客を楽しませる。けれど接客はあくまで店員と客の距離を崩さない。そういう健全な店を増やしていきたいのだと春重は語った。

「もちろんそれは、仕事上の戦略も勝算もあつての話だ。でも、根本のところ、あの生まれつきのホストみたいな男がさあ、ホストじゃない仕事を手がけようとしてる理由を、ちょっとだけ考えてみてくれない？」

「……まさか俺がいやがるからとか、そういうベタなこと言うんじゃないでしょうね」

千晶は鼻で笑った。だが春重は、彼らしく穏やかな、なおかつ内心の読み取れない微笑みで、こう言った。

「だから言ってるでしょ、話は案外単純だよって」

どこがどう単純な話だったのかさっぱりわからないまま、春重との打ち合わせは終わった。けっきょく彼が、異動の件を将嗣に話すのか、黙っていてくれるのか、はっきりとはしないままだった。

(まあ、たぶん、話すんだろう)

春重と別れたあとに夕方近くまで街をぶらついてみたが、渋谷は居心地が悪かった。どうもあの街は若人のためのものと思えず、三十男がひとりで時間をつぶすにはむずかしい。

学生時代はそれなりに遊びにきていた気もするが、十年もまえのことだ。数カ月でビルに入っているテナントはおろか、建物自体が変わってしまうような場所では、どこになにがあるのかすらよくわからない。

109ビルの大型スクリーンでは、流行りらしいJ-POPのPVが流れているけれど、千晶は誰も知らなかった。雑音といっしょに流れていくだけの音楽は、数年後誰の記憶にもろくに残っていないだろう。

けっきょく、書店と大型電気店のパソコンショップをぶらついた。気に入っているミステリ作家の新作を数冊と仕事の専門書を購入し、新型のモバイルをチェックして帰途につくころには、なにもいま買わなくてもよかったと後悔するほど、ハードカバーが疲れた身体には重たかった。

どさりとリビングのソファに腰をおろす。買ってきた本はテーブルのうえに放置したあと、そういえば以前も時間を持てあまして本を買ったものの、けっきょく読まずに終わったことを思い出した。

しんと静まりかえったリビングは広い。何畳あるのか訊いたこともないが、おそらく十八畳くらいはあるのだろう。革のソファやテーブル類は、たしかイタリアのものだ。それも家主である将嗣から聞いたのではなく、似たようなものをたまたまインターネットで見かけたから、推察したにすぎない。

インテリアコーディネーターにすべて揃えさせた、新宿のキング『王将』の城。そして千晶は、もはやちぎれかけの足かせに気づいているのに、出ていきそびれている囚人だ。

十二年は長い。別れようと思ったことは一度や二度ではなく、どころかすすんで身を投げ出した形のつきあいでもなんでもないので。

何度も逃げ出そうとした。大学卒業、就職した会社の最初の移転、そんな大きなできごとではなくとも、

ことあるごとに見せつけられた自分以外の人間との情事。

——それがいやならホストとなんかつきあえない。

春重に冷笑を向けて放った言葉は、ただの嫌味だ。誰が好きこのんで、年がら年中ほかの誰かを抱いている相手とつきあいたいものか。

——十年もまえのこと、いまだに根に持ってるなら、なんでつきあってんの？

問いかげに、彼がホストをやめたあとも、女出入りが引きもきらなかったとは言えなかった。おそらく、店をでかくするため、スポンサーたちとそれなりの『交渉』をしていたことも予測はついている。

やきもきせずにいられるようになったのはむしろここ数年だろう。オーナー業のほうで忙しくなったあの男から、ようやく濃厚かつ不特定多数な女の影は消えた。だが、もはやそのころには、千晶の神経のほうですり切れてしまっていた。

「仕事でセックスするって、そりゃ売春だろ」

くっと喉奥で唾うけれど、いまさら傷ついた気分にはならなかった。そもそも、それこそことの起りから、将嗣が千晶ひとりだけでいたことはなかった。

出会ったとき、すでに彼は『王将』という名前を持つ、新宿の顔ともいえるホストだった。

そして覚悟もなにもなく、千晶は激流に巻きこまれ、めちゃくちゃにされた。

「こんな性格じゃ、なかったんだけどな」

乾いた唾いを漏らしたあと、千晶は両手で顔を覆った。閉じた瞼は熱いけれど、生理的な現象以外で涙ぐむことがなくなって久しい。

かつて千晶の黒目勝ちの目は胸の奥と同じく、潤い、揺れていた。それが干上がり、涸れきったのは、いったいいつのことだっただろうか。

痛くてつらくて、別れてくれと告げては拒まれ、逃げては追いかける、その繰り返しだ。

そのたびに捕まえられ、プレイじみたひどいセックスで屈服させられる。

（いや、それは、最初からだ）

出会うはずもなかったふたりが出会ってしまった。ならば早く終わりにしたいのに、それすら許してもらえない。

すり切れた感情をうつろな目に乗せて、千晶は十二年まえのあの日のことを思いだしていた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>